

視点

子どもの主体性と保育者の意図性



共立女子大学家政学部 田代 幸代

幼稚園教育要領が改訂され、間もなく本格実施となります。幼児期に育てたい資質・能力とともに幼児期の終わりまでに育てたい姿が示されるなど、小学校以降の教育との整合性や円滑な接続が期待されています。同時に、子どもが主体的に取り組む遊びの重要性が改めて確認され、保育者は子どもの遊びをどのように援助するのか、これまで以上に問われるところとなりました。

4歳児（11月初旬）の保育実践例から考えてみましょう。保育室の前庭に材料が用意され、子ども達は前日からの続きで船を作り、タライの水に浮かべる遊びをしていました。いろいろな材料が置かれているので、お菓子の箱で作られた船は、水の中で次第にぼろぼろになっていき、セロテープでつながれた船は、水に濡れて箱がばらばらになっていきます。子ども達がいろいろなものの中から、水に浮くもの浮かないものの材料を試行錯誤しているという見方もできなくはありませんが、水に強い牛乳パックやカップだけをガムテープで貼りあわせて作った船も、水が入れば沈むし、材料の組み合わせ方によってはバランスが悪くて倒れます。ガムテープを切る、貼る技能も、まだ獲得途上でした。どうしたら浮かぶ船ができるか考えながら遊べたら楽しそうですが、考えるべき要素が多すぎる状況でした。保育者は、船が浮かぶには水が入らないよう牛乳パックを閉じる必要に気づかせたいので、「A君のは沈まないよ。何でだろう？」と声をかけていました。しかし、船を浮かべて遊ぶことがうまくできないことから、子どもの集中は途切れていきました。

こうした環境を構成した理由について、保育者は「作った船を浮かべたいと子どもが言ったのでタラ

イを用意しました」と言っていました。浮かべることを楽しむのであれば、この日の実態からすると、水に強い材料や用具を精選しておくことが必要でした。その中でも十分に、材料の組み合わせ方や貼り付け方、バランスを考えながら遊ぶことで、思考力が育つ場面となったでしょう。さらにこの日は「友達と一緒に～」というねらいがありましたが、タライでは一人の船を浮かべるといっぴいになり、友達と一緒に浮かべるには狭すぎる環境でした。数人で一緒に浮かべられる広さがあれば、それぞれの船と一緒に浮かべることもできたかもしれません。

そもそも、子どもたちは本当に水に浮かべたかったのでしょうか。水に浮かべて遊んだ過去の体験がそう言わせてだけで、子どもたちは材料を組み合わせることを楽しんでいて、それを使って遊びたいという姿だったと思われます。それならば、保育室の中に海に見立てられる場所を用意して、作った船を動かして遊ぶという選択肢もあったかもしれません。11月は、友達と一緒にのごっこ遊びが充実していく時期でもあります。船室をつなげ友達と一緒に大きな船にする、絵本の再現から「海賊船」や「11匹のねこの船」にするなど、イメージ豊かに表現を楽しむ方向を支える援助もできたかもしれません。

遊びを通して子どもが学ぶためには、何よりも子どもの主体性が大切なのは異論がないところです。表面的な子どもの言動の奥にある思いや願いを読み取り、今どのような資質や能力を育てたいのか、意図を明確にした環境の構成と援助が重要なのです。こうした子どもの主体性と保育者の意図性が交差するところに、遊びの充実と豊かな学びが広がり、保育実践の質も向上していくのだと思います。